特集　防災まちづくり大賞

□防災まちづくり大賞受賞その後の活動状況について

久万高原町消防本部
（旧上浮穴郡生活環境事務組合消防本部）（愛媛県）

1. 管内紹介

上浮穴郡久万高原町は、愛媛県のほぼ中央部にあり、旧久万町・面河村・美川村・柳谷村の4力町村が2004年8月1日に合併した高原のまちです。県都松山市の中心部から南へ約34キロメートルに位置し、総面積は584平方キロメートルと県下最大を誇り、西日本最高峰(標高 1,982 メートル)の霊峰石鎚山(日本七霊山のひとつ)を筆頭に標高1,000 メートルを超える四国山地に囲まれた山間地域です。夏は冷涼多雨、冬は寒さ厳しいことから、「夏は四国の軽井沢」「冬は四国の北海道」と形容されています。快適な高原リゾートの機能や農林資源が「住む」「働く」「遊ぶ」「憩う」といった人々の生活と調和した、「ひと・里・森がふれあい、ともに輝く元気なまちづくり」をめざしています。

本町の主産業は林業で、日本三大林業地として、つとに有名です。農業は、米作、葉たばこ、お茶のほか、シイタケ、トマト、高原野菜など、観光面では、「石鎚山」のほか、国指定名勝「古岩屋」(約4,000万年もの歴史が残した礫岩峰)、国指定史跡「上黒岩岩陰遺跡」(今から12,000年前の縄文草創期から後期にわたる複合遺跡で、延・々10,000年近くにわたり人が住んでいたという点で、長崎県の福井洞遺跡と並ぶ貴重な縄文岩陰遺跡)、日本三大カルストのひとつ「四国カルスト」など、春の新緑、山菜狩り、夏は涼を求めて、秋の紅葉、冬は雪景色、スキーと、四季を通じて楽しめる観光資源、レジャー施設が豊富にあり、多くの行楽客で賑わいをみせています。

消防業務は、1978(昭和53)年4月1日、久万、面河、美川、柳谷、小田町の2町3村で構成する(当時)上浮穴郡が行政事務の合理化と広域行政への対処を目的として設立した上浮穴郡生活環境事務組合の業務として開始しました。その後、前記した2004年8月の1町3村の合併により久万高原町が誕生、同町と旧小田町の2町による事務組合となり、さらに、2005年1月1日から小田町が合併により喜多郡内子町となったことに伴い、消防業務が大洲地区広域消防事務組合に移管され、以後、久万高原町を管轄とする「久万高原町消防本部・消防署」として、一本部、一署、一支署により業務を継続しています。

2 相次ぎ防災まちづくり大賞を受賞

本町は、地理的条件などから、町村合併以前から過疎化、超高齢化(本年4月1日現在の久万高原町の高齢化率は41.49パーセント(愛媛県長寿介護課調べ)で、県下第1位)が著しく、こうした山間地における自主防災組織の育成指導、防災意識の啓発、高揚のため、「安全で安心して暮らせる地域づくり」を基本施策に掲げ、多岐にわたる総合的な取り組みをしてきました。また、旧小田町においては、社会福祉協議会と警察署(3駐在所)、消防署(小田分駐所)の各機関が、それぞれ個別による高齢者に対する防災・福祉活動に限界を感じ、三者が垣根を取り払い、職域にとらわれることなく一体となることで、きめの細かい活動が展開できるとして、1994年4月1日に「おだ PFW チーム」(Police(警察)、Fire(消防)、Welfare(福祉)の頭文字)を発足、「自然と愛情あふれる福祉のまち'おだ、をめざして」地道な活動を展開してきました。こうした取り組みが認められ、全国の選りすぐられた事例の中から、上浮穴郡生活環境事務組合消防本部の「安全で安心して暮らせる地域づくりのための方策」が第2回(平成9年度)防災まちづくり大賞(消防庁長官賞・防災ことづくり部門)を受賞(全国120事例のうちの5事例)、さらには、「おだ PFW チーム」の活動が第4回(平成11年度)防災まちづくり大賞の消防科学総合センター理事長賞を受賞(全国で10事例)し、相次ぐ快挙を得ました。

3 受賞当時の活動及びその後の状況

〈消防本部の取り組み〉

◎少年消防クラブ火災予防サミット活動

管内で結成されている12(当時)の少年消防クラブ員が一堂に会し、「火災予防」「災害予防」について審議し合い、その結果を自分自身にできる火災予防の実践に反映する活動を繰り広げました。平素の活動発表やアンケート調査に基づく研究発表などのほか、高齢者のために自分たちに何ができるかを考えるため、高齢者の擬似体験を実施するなどしました。「お年寄りの身体能力がよく分かった。いざというときには隣近所のお年寄りを助けてあげたい」との感想もあり、クラブ員同士の資質を高め合いました。

同活動は平成4年度から、極力、授業時数が縮減されないようにと、教育委員会との共催により土曜日に開催してきましたが、平成7年度から月2回の学校週5日制の施行、平成14年度からは完全学校週5日制が実施となり、新学習指導要領において教育内容が厳選されたことから、平成13年度をもって、やむなく休止状態となっています。しかし、『地域や学校、子どもたちの実態に応じ、学校が創意工夫を生かして特色ある教育活動が行える時間』『国際理解、情報、環境、福祉・健康など、従来の教科をまたがるような課題に関する学習を行える時間』として「総合的な学習の時間」が設けられており、今後、こうした時間を有効に活用して、活動再開につなげていきたいと考えています。

（第3種郵便物認可）

火災予防 ボクらも協力

上浮穴郡の少年消防ク

上浮穴郡内の各小中学校で組織する少年消防クラブの火災予防サミットがこのほど、上浮穴郡久万町久万町の町民館ホールであった。12校からクラブの代表者ら約60人が出席。意見発表やお年寄りの動作体験などを行った。

久万でサミット

場所や原因 調査発表

お年寄りの動作体験も

▲おもりなどを装着し、階段を上り下りしてお年寄りの動作を体験した火災予防サミット

少年消防クラブは、火災を予防する方法や火に関しての問題を考え、災害から身を守る方法を研究することを目的にする、子どもたちの組織。毎年サミットを開いており、今年が十回目。

優良クラブとして美川中学校少年消防クラブが表彰された後、各校が意見発表。火災の場所や原因、時間を約一カ月間にわたり調べてまとめた発表などがあった。

この後サミットテーマ「お年寄りを災害から守るために何ができるか」を考えるため、見えにくい眼鏡や重いジャケットを装着して階段を上り下りしてお年寄りの動作を体験。意見交換では「重い荷物は持ってあげたい」「相手のペースに合わせるのが大切」などといった意見があり、あらためてお年寄りへの接し方を考えた様子だった。

提供　愛媛新聞〔2001（平成13）年11月22日　木曜日〕

◎少年消防・女性防火合同「防火交通茶屋開設活動」

秋の紅葉行楽期ともなると、冒頭の西日本最高峰「石鎚山」のほか、その南麓に抱かれた’聖流郷、面河渓谷には県内外から多くの行楽観光客が訪れることから、入山者のたばこの投げ捨てによる山火事防止や環境保護、道中の交通安全を訴え掛ける活動を、地元の面河小学校少年消防クラブ、渋草女性防火クラブが合同で実施しています。通行車両を一台ずつ停車させ、携帯用灰皿、ノベルティグッズのほか、子どもたち手作りの啓発チラシや、石鎚神社で祈願してもらった手作り防火マスコットを手渡し、「ようこそ１私たちの面河に。安全運転で紅葉をお楽しみください」「山歩き中は、たばこの

投げ捨ては絶対にゴメンです」などと呼び掛け、火災予防や環境保護、交通安全に一役買っています。中には逆に入山客から「大変だろうけど頑張ってね」と温かい声を掛けられたり、「ご苦労様」とお菓子やジュースをいただいたりして、活動を終えたクラブ員たちは毎年、満足感あふれる表情をしています。

◎高齢者安全活動

管内の少年消防クラブでは、校区内の一人暮らしのお年寄りに防火や長寿の願いを込めた「防火のおたより」を配る活動を実施しています。おたよりのほか、お茶の葉(かまいりから天日干しまで、すべてが子どもたちの手作り)や、しめかざり、防火ポスター(版画)を添えるなどして、お年寄りから「毎年わざわざありがとう。一人で暮らしている者にとっては、子どもたちの笑顔が何より元気の源です」などと好評をいただいています。中には、道路から数 100 メートル離れた一軒家という世帯もあり、クラブ員は一軒一軒訪問することで、普段のお年寄りの苦労を身をもって感じているようです。

また、女性防火クラブでは、「給食サービス」や愛の一声慰問活動を繰り広げたり、台所や風呂のたき口などの防火点検を実施するなどして、高齢者安全対策の重要な一翼を担っています。

こうした平素からの地道な気遣い活動は、有事の際に円滑に機能しています。

2001 年 3 月 24 日 15 時 28 分、安芸灘を震源とする「芸予地震」が発生、管内の旧久万町では震度 5 強を記録しました。だれもがとっさに思うように動けなかったであろう状況下において、同町の下直瀬女性防火クラブ(クラブ員 50 人)は発災後、ただちに近隣の高齢者世帯や身体の不自由な世帯を訪問して安否確認活動を行い、いち早く地区内全世帯の無事を確認、訪問を受けた高齢者からも「『何ともなかったんよ』と顔見知りのクラブ員さんと話をしただけで落ち着いた」とか「『もう大丈夫じゃけんな』と言われて安心した」といった感謝の声が聞かれ、活動の成果が目に見えて表れていました。この活動は民放テレビ局の防災について考える報道特別番組にも取り上げられ、県内はもとより、中国、近畿地方にも放映され、広く紹介されました。

お年寄り宅訪問

児童が茶を配布

面河小防火呼び掛け

上浮穴郡久万高原町中組の面河小学校(中矢真弓校長、十七人)児童が六日、自分たちで摘んだお茶を手に、旧面河村内の一人暮らしのお年寄りを訪ね、防火を呼び掛けた。

お茶の配布は、同小が少年消防クラブ活動として毎年実施。茶葉は学校農園で、児童と保護者が栽培し摘み取った。製茶した約五十㌘を袋に詰め、「いつまでもお元気で」といったメッセージとイラストを添えた。

ヘルメットとユニホーム姿の児童らは、七班に分かれて計八十戸を訪問。児童から「火事に気をつけ、元気で長生きを」とお茶を渡された同町渋草の竹田モモエさん(八四)は、「ありがとう。毎年楽しみにしています」と目を細めていた。

お茶をお年寄りに渡し、防火を呼び掛ける児童

提供　愛媛新聞〔2006（平成18）年７月11日　火曜日〕

バケツリレーでの消火訓練をする女性防火クラブ員

★住民参加し防災訓練★久万高原　地域住民の防災意識を高めようと上浮穴郡久万高原町畑野川地区の防災訓練が15日、同町上畑野川の畑野川小学校であり、参加した地元住民ら約100人が消火や救助活動を確認した。

訓練は震度５強の地震が発生し、小学校の理科室から出火したと想定。先生の誘導で児童が校庭に避難すると、女性防火クラブがバケツリレーで初期消火に当たった。

消防署員が逃げ遅れた児童を校舎２階からはしごで救出。県防災ヘリコプターで重傷者をつり上げて救助したり、負傷者を応急救護したりと、参加者は真剣な表情で訓練に臨んでいた。

同町消防本部の山本進消防長が「一層の訓練に励み、自分たちの地域は自分たちで守る、との意識で防災活動に当たってほしい」と講評した。

提供　愛媛新聞〔2005（平成17）年11月22日　火曜日〕

◎あなたのそばの救命士

管内は、地理的条件などから、119 番受信から救急車が現場に到着するのに全国平均の約 6 分をはるかに上回る約 12 分を要していることから、救命率を向上させるには、救急現場に居合わせた一般住民による応急手当が不可欠であることは言うまでもありません。

そこで、1993 年に制定した「応急手当の普及啓発活動の推進に関する規程」に基づき、「あなたです 1 勇気を出して救うのは」をキャッチフレーズに、消防団や女性防火クラブをはじめ、中高生、各種事業所、地域住民にいたる幅広い層に対して応急手当の普及を推進、約 4,000 人にも上る修了者（管内人口は 10,946 人（2005 年国勢調査速報値））が誕生しています。現在では、中学校新入生に対して救命講習を実施、進級時に再講習を受講するなどの継続的な講習体制を構築するなどしています。

◎地区防災訓練

「学校」は有事の際の地域の防災拠点であるという認識のもと、各地域の学校において幼年・少年消防クラブのほか、地元消防団、女性防火クラブ、駐在所、消防署が一体となった地域総出の避難、火災防ぎょ・救急救助訓練を実施し、地域の防災に対する連帯感を深め、防災力アップに努めています。

〈「おだ PFW チーム」の取り組み〉

高齢者が家にこもりがちにならないようにと「ふれあい広場」を開催、県警音楽隊のドリル演奏や 119 番通報訓練、給食サービスなどで交流を深めたり、粗大ゴミの廃棄や雨どいの補修などといった一人暮らしであるがゆえに、したくてもできないお年寄りの困りごとに対応したりと、警察・消防・社協の三者が職域にとらわれずスクラムを組むことで融通のきくきめの細かい福祉サービスが具現化されました。こうした功績は、3 期 18 年にわたり参議院議員としてライフワークの福祉活動に全力を傾け、家族ぐるみで福祉に取り組んでこられたお笑いタレントの西川きよしさんが、高齢者福祉の画期的な取り組みの先進地として国会で紹介し高く評価するなど、一躍脚光を浴びました。

残念ながら前述の町合併などの諸事情により活動の一時休止を余儀なくされてはいますが、高齢者から活動再開を強く望む声が寄せられており、各方面に働き掛け、活動再開に向けた準備が進められています。

消火器の操作難しかったよ

久万高原で防災訓練

防災の日の一日、上浮穴郡久万高原町直瀬の直瀬小学校グラウンドで、消防署員や地元住民ら約百人が災害に備え訓練した。

震度5強の地震により授業中に火災が発生したとの想定で、児童らはグラウンドへ避難。地元消防団や女性防火クラブが

けすゾウくん（後方）搭載の訓練用消火器を噴射する子ども

プールからポンプで放水し、児童を交えてバケツリレー、負傷者の応急手当ても学んだ。ホースを使った放水体験や救助マットへの飛び降り訓練もあり、児童はやや緊張した様子で取り組んでいた。消火通報訓練指導車「けすゾウくん」も出動し、防災教室を開いた。児童らは訓練用消火器の操作を習い、的へ向かって水を噴射。直瀬小二年の板崎巨樹君(八)は「難しかった。(火災の時は)うまく使えると思う」と話していた。

提供　愛媛新聞〔2006（平成18）年９月２日　土曜日〕

4 結　語

平成の市町村大合併、地方財政の窮迫や地方交付税の削減などにより、多額の経費をかけた活動は極めて困難な状況下にあります。今後とも、消防団、女性防火クラブ、幼年・少年消防クラブが一体となった自主防災組織の結成推進を図るとともに、農繁期には隣近所で作業を手伝い合うといった昔ながらの田舎ならではの共助理念を礎に、「あそこの高齢の○○さんは、近隣の△△さんと××さんが普段から気遣い、いざというときにはすぐに駆け付けて適切に対応する」といった向こう三軒両隣りの防災支援体制を構築するなどして、「だれもが安全で安心して暮らせる」「いざというときにはだれもが救いの手を差し延べる。

そしてその手には確かな知識と技能が備わっている」一そんな小さくともキラリと光る防災・減災ナンバーワンのまちづくりを進めていきたいと考えています。